

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

生活文化と民族文化の親子間継承——在日コリアン二世のライフストーリー・インタビューから

猿 橋 順 子*

1. はじめに

本論は在日コリアン二世のライフストーリーの中で、語り手が親および養育者から何かを受け継ぎ、あるいは受け継がなかったと語るのかに注目して整理することを目的とする。在日コリアンに限らず、移民の世代間継承をめぐる研究では、民族的なもの・ことの継承に関心が集まりがちである。本研究でも、インタビュー参加者を募る段階で、在日コリアンであることは研究者と参加者の双方に意識されている。しかし、個人が来し方を語る時、在日コリアンの民族文化が常に意識されているわけではない。それは前景化されたり後景化されたり、強調されたり脱文脈化されたりする。

家庭は民族文化継承の重要かつ基本的な社会単位とされる一方で、移民の家庭内における良好な世代間関係は、若者世代のアイデンティティのためにも、高齢世代の情緒的安定のためにも重要であることが指摘されている (cf. Levitt, Guacci & Weber 1992)。ただし、世代間関係の質は把握や測定が難しい。Bengston & Robert (1991) は、世代間関係を見る上で、愛着 (affectual)、関連性 (associational)、合意 (consensual)、機能 (functional)、規範 (normative)、構造面 (structural) といった複数の視点から見る必要があるとしている。それぞれを簡単に説明する。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

Bengston & Robert (1991)によると、愛着面のつながりとは、愛情、親近感、互恵性のような肯定的な感情に関連するものである。関連性とは家族が接触する頻度と様式である。合意とは価値観、態度、信念に賛同する程度である。機能面とは相互支援の程度に関係する。規範的とは家族内の役割や義務にどれだけ関与するかといった面である。最後の構造面とは世代間関係に影響する環境要因で、地理的な距離や、婚姻、健康状態などがこれに含まれる。

これらは相互に関連し合って家庭内メンバーの関係を形作っている (Bengston & Robert 1991) わけだが、とりわけ、移民は文化的価値観の共有と合意 (consensual inter-generational solidarity) が、メンバー間の関係により重要な影響を及ぼすという (Phinney, Ong & Madden 2000)。このことから移民の文化継承を見ていく上では、民族文化的な何が継承されたかだけでなく、それがどのように伝えられたのか、家族メンバー間の関係も視野に入れながら見ていくことが重要であると言える。

そこで、本論はまず民族文化的なもの・ことに限定せず、語り手が親から受け継いだものと受け継がなかったものとして語る生活文化に広く注目する。語り手は、親から何を、どのような意味を帯びて継承したと認識しているのか。それらはいつ、どのような場面で顕在化するものとして語られるのか。受け継がなかったものについてはどうか。これらについて語り手の主観的な意味世界に接近することを試みる。

在日コリアン研究において、すでに世代論研究が多く蓄積され、三世、四世を対象とした研究も進んでいるなか、なぜ今、二世を対象とした基礎的研究を展開するのか、という疑問もあろう。民族的アイデンティティを含め、集団的・社会的アイデンティティも世代認識も談話の中で常に変化する (Hall 1996, Arber & Attias-Donfut 2000, Chapman 2008)。在日コリアン二世は家族世代の最年長世代となりつつある。実際、インタビュー参加者の親の多くがすでに他界していたが、「最近になって親のことをよく思い出すようになった」とか、「今になって親の気持ちが分かる」といった親世代との関係や出来事について再解釈する語りが増えなかった。本論は、在日二世が、年月を重ねて振り返る親

子間の生活文化継承の意味世界に接近しようとするものである。

2. 調査概要

インタビューは、2014年9月から2017年にかけて実施した。参加者は生年順に表1の通りである。参加者同士が家族関係にある者もいる。3. 趙光渉さんは1. 趙琴祚さんの弟、7. 宋宏明さんと8. 高正美さんは夫婦である。ほとんどの調査参加者の両親が、すでに他界したり寝たきりの状態にあり、インタビュー実施時に健在だったのは13. 洪蓮順さんの母親のみである。全員子どもがおり、洪蓮順さん以外は孫がいる。インタビューは事前および当日に調査の趣旨を説明し、参加の意思を確認した。場所は参加者の自宅や職場など、彼らの生活圏に接近することをこころがけた。

インタビューは各人の来し方について、なるべく自由に語ってもらった。歴史的証言としての意味よりも、各人の主観的意味世界に接近することを重視し

表1 調査参加者一覧

	名前(仮名)	生年	性別	親の世代	居住地
1	趙琴祚	1930	女	両親一世	兵庫
2	余徳子	1936	女	両親一世	大阪→福岡→大阪
3	趙光渉	1940	男	両親一世	兵庫
4	襄秀一	1944	男	両親一世	東京→神奈川
5	李希淑	1949	女	両親一世	大阪
6	成花子	1949	女	両親一世	埼玉→神奈川
7	宋宏明	1951	男	父一世, 母日本人	愛媛→東京→山口→愛媛
8	高正美	1951	女	両親一世	山口→東京→山口→愛媛
9	金民愛	1951	女	父一世, 母日本人	愛媛→大阪→京都→愛媛
10	黄玲玉	1953	女	両親一世	大阪
11	鄭真樹	1957	女	母一世, 父二世	大阪
12	趙幸姫	1957	女	父一世, 母二世	兵庫→神奈川
13	洪蓮順	1960	女	両親一世	大阪

た点で、口述史というよりライフストーリーに分類されよう(桜井・小林 2005)。インタビュー後は逐語録を作成し、主題分析(topical analysis, van Dijk 2001 p. 102)によって整理した。主題とは、「言語の使用者が談話を産出したり理解したりする際に構成する包括的な意味」で「意味論上のマクロ構造」と定義される(van Dijk 2001, 服部訳 p. 142)。すなわち、何について語っているのか、語りの「要点」を把握する作業である。

主題分析で、親から受け継いだ、あるいは受け継がなかったもの・ことに関連する語りを抽出した。それらのデータにつき生活文化項目(石川 1998)に沿って分類した。石川(1998)は、生活文化を生活全般および文化一般とも異なる範疇として同定するために、「個々人が『自らの生命の持続を支えるための活動』のなかから生みだしたものであり、それが集団的に支持され、世代的に継承されたもの」(p. 10)と定義づけ、内容列挙の試案を以下のように提示している。

- (1) 非形象的生活文化: ①地域独特の土着思想, ②言語¹⁾・方言(単語)・イントネーション, ③土着信仰, ④生活の知恵, ⑤技能・芸能・舞踊(形象化された作品を除く)
- (2) 形象的生活文化
 - (2)-1 身体的形象 = ①自己表現としての身体加工(たとえば, 化粧)
 - (2)-2 表象的・造影的・造形的形象 = ①民謡, ②工芸品, ③道具, ④工具, ⑤建造物など
- (3) 制度的生活文化: ①ジェスチャーや身振り, ②行動様式(歩き方, 座り方, 視線など), ③日常的慣習(たとえば, 一日に何回の食事を摂るのを通常とするか, 食材の選択, 調理法, 使用食器, 盛り付け方などの供し方, 食べ方, 医療そのほかの着材や寝具の選択, 裁ち方, 縫い方, 仕立て方, 着装の仕方, 居住様式など), ④マナー・エチケット(挨拶などの礼儀作

1) 石川(1998)では「国語」であったが、家庭内に注目した場合、国語以外の言語の継承も考え得ることから、ここでは広く「言語」とすることとした。

法, 贈答習慣, 年中行事, 通過儀礼, 冠婚葬祭行事とそれに伴う贈答儀礼など), ⑤おとなや子どもの遊びに関わる慣習, ⑥関係様式 (協力・協働様式, 上下関係, 対面的関係における物理的距離や位置のとり方, 感情表現のパターンなど), ⑦地域内や家族内における地位配分と役割の設定, ⑧組織化の原理や集団の形 (家族関係や家族構成の形や運営方法), ⑨地域共同体構成の形や運営方法, ⑩種々の集団など。

(石川 1998, p. 11)

上記の分類に基づき, 在日コリアン二世のインタビュー参加者が, 親から継承した, あるいは継承しなかった経緯が語られた生活文化項目を紹介する。その際, 朝鮮半島, 両親の故郷, 在日コリアンコミュニティといった在日コリアンであることとの関連がどのように語られるかに注目する。あるいは項目によっては, 必ずしも朝鮮半島, 韓国・朝鮮人に独特なものではなく, 日本やアジア全域においてあてはまるような項目もあるかもしれない。本稿では, 語られたもののルーツを吟味するよりも, 語り手がそれを親から受け継いだ民族的な生活文化であると位置づけているかどうか注目に注目する。

3. 生活文化の親子間継承の語り

(1) 非形象的生活文化

① 両親の故郷, 在日コリアン集住地域の土着思想

両親が持っていた, 森羅万象のとらえ方や, 物事の理, 人生の意味, 世界観についての語りは少なくない。ただし, それは明確に言語化され, 引き継いだものとして語られるというよりも, インタビューの中で初めて言語化し, 整理し, 接近しようとする試みが見られた。親が持つ世界観は, 人格を語る上で参照されることも多く, その場合は民族に必ずしも結びつけられるとは限らない。しかし, 裴秀一さんは, 人間関係のあり方, 情のかけ方について, 裴さんも親から受け継ぎ, 子どもにその片鱗が残されている民族的なものとして位置づけた。

【抜粋 1: 裴秀一】日本人が持つてる情と朝鮮人が持つてる情と、ちょっと違うんだよな。良い悪いの問題ではなくて、日本人の情は薄く広くみたいなところがある。朝鮮人の情は厚い。韓国でものすごく流行った映画で「チング」(邦題は『友へ チング』)っていうのがある。日本で試写会をやるっていうんで券をもらって息子と観に行った。帰りに(息子が)「でも日本人にわかるのかな、この感覚」って言うの。それ聞いて、「え、お前それわかるの」って思った。息子ってもう三世だよな。こいつがこんなこと言うのか、わかるのかって。それは儒教的な下地の中で育てられてくる情みたいなもの、やくざみたいなもので、アボジ(父)の葬式を仕切ってくれた男には恩義がある。そういう情を友達の関係の中で交わしていく深さ、断ち切れなさ、引きずられていくだとか。結局日本であまりヒットしなかったんだ。でもそれがわかるっていうのは、子どもは親の背中を見て育ってきてる。私も一世に近い二世だからものすごく封建的なところもあるし、朝鮮人の典型的な家庭が滓として残ってるみたいなのところがあるけども、そうやって受け継がれている部分があるんだな。

韓国語に興味を示さず、日本人女性と結婚した息子が、韓国人と日本人の情のかけ方の違いに気づき、言及したことは、秀一さんにとって意外なことであった。情のかけ方の違いは良し悪しではなく、両文化の違いであるから、教訓として次世代に教え諭すといった行動にはつながらない。それでも、息子は知らず知らずのうちに「親の背中」を見ることで体得し、日本社会の中で朝鮮人の情のかけ方が「滓として」残ったのだらうと言う。伝えたものではなく、無意識のうちに伝わったものを息子に指摘され、自分自身も朝鮮人家庭の中で培ったものであることに気づいたという語りである。

② 言語、方言、表現

在日コリアン二世にとって、親からの継承言語は、韓国・朝鮮語を前提に語られる。親からの継承という面に着目すれば、韓国・朝鮮語に限らず、朝鮮半

島および日本の地域変種や、在日コリアンコミュニティで育まれた表現や言い回しなども含まれても良いはずだが、親から引き継いだ言語については、概ね標準的な韓国・朝鮮語を引き継いだか、引き継がなかったかの語りに集約されていた (cf. 猿橋 2016)。

日本の学校に通った余徳子さんにとって、韓国・朝鮮語を学習する機会は父親が夜に自宅で行う「訓練」であったという。それは朝鮮語学習というよりも、父親の人柄の文脈から語られた。

【抜粋 2: 余徳子】父は毅然としていました。いつもパジチョゴリ (韓服) 着ていましたから。私たちがメチャリ (ムチ) もって叩かれました。あの一、発音が出ないじゃないですか。ウル (음) とかニウン (ㄴ) とか、パッチム (ハングルの終声) が出ないじゃないですか。すると舌を天井に押せとか巻けとか。厳格で、厳しくて立派な父でした。

徳子さんの父は薬局を営んでおり、日本語にも長けていたので、日本人の「駐在さん」からも近隣の朝鮮人労働者からも頼られる存在だった。その家庭教育は徳子さんの目にも「特別なもの」であった。数年前、徳子さんは民族団体婦人部の代表に就任し、公式な場で韓国語を使うようになった。その場面の語りでも「私は発音が悪いんです」と繰り返していた。韓国語の発音は、父が期待する水準に届かなかった部分としてずっと残されている。第三者から見れば継承されているように見えるものが、本人にとっては欠落部に注目が集まっており、継承できなかつたと捉えられている場合もあることが示唆される。

もうひとつ徳子さんの語りに特徴的なことは、民族文化の一部と言える韓国・朝鮮語の継承のための実践が、父親の「厳格」かつ「立派」な人格を語る上で挿入されている点である。韓服を着ていたことと併せて結び付けられることから、徳子さんにとって民族文化を実践し、子ども達に継承させるための行動をとることが、人としての「立派さ」の指標として認識されていることが窺える。

③ 土着信仰

朝鮮半島で実践していた信仰を移住先でも実践するかどうかは、両親が渡日した年齢や、渡日後の親族の規模、彼らが近隣に暮らしているかなどもに左右される。余徳子さんの家庭で朝鮮半島での風習や伝統をなるべく形を変えずに実践することは、薬局という職業とも深く関連することとして語られた。

【抜粋 3: 余徳子】父が薬局ですからね、そういうのはこだわらないですか。私の誕生日は戦時中だろうと鯛の大きい小さいはあったかもしれないですけど、尾頭付きで、赤飯炊きましてね。ピルして（拌んで）ましたからね。「ウリ チェワンニム アムゴットモルムニダ、アジット キオカゴ イツソヨ（チェワン様、何も知りません）」と拌んだことを今でも記憶しています。私も自分の子どもが生まれた時もしました。孫にもします。それは子どもの神様で一番怖い、清潔好き。だから「モッコジャゴ モッコジャゴ（食べて寝て、食べて寝て）して、チャルクグラ（すすく育ちなさい）」言うてピルしますよね。三週間、そこにわかめとお米とお水をおいて。（中略）でも日本の七五三もしますよ、ちゃんと。それは日本にいるから日本の学校に行っている子どもたち、孫も不審に思うじゃないですか。ちゃんと着物を着せて写真撮ります。家族の思い出じゃないですか。

朝鮮の伝統を継承することに続いて、類似の日本文化も積極的に取り入れていることが連想されて語られた。ただし、そのことの意味は若い世代が引け目を感じないようにという配慮と、「家族の思い出」作りのひとつと位置付けられている。親だけでなく、その上の世代から受け継がれている朝鮮半島の伝統を受け継ぎつつ、次の世代が日本社会で定住していくための環境も整えることを自らの役割、責任と捉えている様子が窺える。追加的な文化実践であるため、経済的な基盤も必要であろう。徳子さんが親の薬局という職業に結びつけて家族行事を語るのには、薬局という職業が経済的および社会的基盤の上に成り立つものという認識とも関連していることが類推される。

④ 生活の知恵

在日コリアン二世の語りの中で親が実践する生活の知恵は実に幅広く豊かに語られた。その多くは継承するには至らず、そのことが悔やまれると語られる。また、それらの知恵は朝鮮半島で実践されていたことなのか、在日コリアンの共同体の中で生み出され、共有されてきたものなのか、あるいは個人の創意工夫によるものなのか、そのルーツについては曖昧な面がある。直接、親から聞いてというよりも、朝鮮半島との環境、風土の違いなどから推量して在日コリアン集住地域で人々が知恵を持ち寄り、編み出された方法だろうと解釈されるといった具合である。

高正美さんは在日コリアン集住地域の中でも抜きん出て生活の知恵に秀でていた母を振り返り、「どこでこういう知恵が生まれたのか」と疑問で結んでいる。

【抜粋 4: 高正美】今でいう生活の知恵は、うちのオモニすごかったと思う。ムッ（どんぐり料理）も、シルトック（餅）も、タッペギ（にがり酒）も作った。マッコリ（にがり酒）を作るのにオンドル（韓国式床暖房）の部屋の端っこに、大きな瓶にイブル、毛布を巻いて。私らは寒いのに、ポコポコポコとお母さんが音を感じながら作る。ほんとに「何をしておるか」と思ったけど。（中略）食べさせるためのこういう知恵がどこで生まれたんかなというのはあったね。

正美さんの母親には頼れる親戚も周辺におらず、社交的でもなかった。記憶の中の母は一人黙々と仕事の手を休めない姿ばかりである。正美さんが思い出す母の「生活の知恵」は朝鮮半島の伝統的な料理（ムッ、シルトックなど）や生活設備（オンドルなど）に関連しているものの、それが実践できたのは母の勤勉さと、家族の生活環境を整えるという使命感に依拠していたと捉えられている。「今でいう生活の知恵」という表現から、正美さんがこれらの母親の生活文化実践をかつては「生活の知恵」とは捉えていなかったことを窺わせる。さらに、

正美さんは母が持っていた生活の知恵を一切引き継いでいないと言う。その理由は硬直化された母子関係にあった。関連する語りは「(3) ①ジェスチャーや身振り」の項でも紹介する。

「生活の知恵」についての語りは、分類上「制度的生活文化」にあてはまると考えられるものも多く、個々の制度的生活文化の総体が「生活の知恵」と総称される傾向が語りに認められた。

⑤ 技能・芸能・舞踊（形象化された作品を除く）

生活の知恵と同様に、どこからが在日コリアンの生活文化における技能に分類できるかは見解が分かれるところになるだろうが、調理法に留まらず流通させることで経済的な価値を生み出していたことから、どぶろく作りは集住地域で生み出され、実践された技のひとつに分類できよう。ただし、それは集住地域の中で年齢の近い先輩から後輩へと伝えられるものであり、その様子を見聞きすることはあっても、親子間で技能を仕込まれたという語りはなかった。前項の抜粋4で高正美さんが語っているように、子どもから見ると「何をしておるか」と不審に思うといった具合である。

芸能や舞踊について、親から伝承したという語りはあまり見られなかった。唯一、楽団を生業とする時期があった宋宏明さんの父親についての語りに認められた。ただし、父親が宏明さんに踊りや音楽を教える機会はなく、父親の実践を側で見聞きしていた宏明さんが自然とそのリズムを身体に染み込ませていったということであった。

【抜粋5：宋宏明】何のミョンジョル（名節）か記憶ないけど、ノンアック（農楽）あるじゃないですか、楽器持ってね、花の帽子をかぶってずっと回るんだけど、アボジは常にそこに入ってやってた。だからリズムとかそういうのは、習わずして自分の体の中に取りました。アボジは楽器は何でもできました。

母を病気で亡くし、父子家庭となった宏明さんの家は貧しく、宏明さんの幼少期の記憶には家財道具も食卓もないという。それでも父は地域の集まりにでかけては音楽を奏でた。それは宏明さんが遠巻きに見るものであり、入り込める空間ではなかった。にもかかわらず、その音楽のリズムは宏明さんの「体の中」に今もあるという。

また芸能などについては父親と母親で正反対の価値付けをするといった話も聞かれた。そのような場合、子どもはどちらかについて継承するといったことはせず、両者から距離を置いて客観的な立場を保つことを心がけたりする。同様の様子は土着信仰の実践をめぐっても聞かれた。子どもにとって民族文化や生活文化の継承よりも両親の不和を最小化することの方が大切な優先事項だったのであろう。

(2) 形象的生活文化

① 身体的形象

幼少時代の記憶の中で母親の調髪や化粧は質素、あるいはほとんど施されないものと語られた。そのため母から娘に、あるいは父から息子に身体的形象の継承が語られることはなかった。唯一、挙げるとすれば高正美さんが髪をお尻に届くまで長く伸ばし、毎朝母がお下げに整えてくれたという語りがあった。正美さんが髪を切ると母は烈火のごとく怒り、畑に連れて行かれて更に髪を切られたと言う。長く伸ばし続けていた髪を切ったことに対する極端とも言える母の反応は、翻って髪を伸ばすことに何らかの価値観や信念が込められていたのではないかと推察された。しかし、正美さんは母親自身も「分からん」と言うだろう」と説明のつかない行動だと結んだ。

【抜粋6：高正美】

高 髪はお尻の下まであって朝起きたらオモニがきれいに三つ編みにしてくれました。

* いつ切ったんですか？

- 高 反乱を起こしたんよ、中学生の時。オンニ（姉）が切って外巻きにしとったのね。うちも切りたいてって言って少し切ったらオモニが怒って、畑連れて行かれてもっとジョキジョキジョキジョキって（切られた）。
- * なんでそんなに怒ったんですか？ 女の心得みたいのがあって伸ばしていたとか？
- 高 わかんない。でもオモニが言ったのは、私の髪が真っ黒でいい髪だから。昔はシャンプーもなくて石鹸で洗う。シラミもわくでしょ。シラミ取りの櫛でオモニがダーッと梳くのよ。もう嫌でね。中学生になったら、みんな可愛くするし。なんでそんなに怒ったのかはわからない。オモニに聞いても「わからん」て言うだろうね。

正美さんの母は13年前に他界しているため、もう母の真意を確かめる術はない。しかし、この語りの事例は、親の説明のつかない行動は、その背後に何か意図や信条があったのではないかと想像を掻き立てる。説明のつかない面があったからこそ、この出来事は正美さんの記憶に印象的に刻まれていたとも言えよう。正美さんはもう母親に直接確認することはできない。しかし、これから先も、母のこの行為についての納得のいく解釈に通ずる語りに出会うことがあれば改めて再解釈される可能性は開かれている。

② 表象的・造影的・造形的形象

在日コリアン二世の中には、両親が保持していた在日コリアンであることを象徴する物を形見として保管している語りが聞かれた。李希淑さんは母が着ていたチマチョゴリを、母の形見として大切に保管している。それらは在日コリアンとしてのアイデンティティを意識せずに暮らしていたら、きっと処分してしまったらと思う品々である。同様に、裴秀一さんは父の国民登録証、母親が失業対策事業に就いていた時の手帳を在日コリアンとして生きた証として大切に保管している。その語りでは在日コリアンコミュニティの置かれた状況が不安定であることから敢えて処分されてしまったものについても想起させた。

【抜粋 7: 裏秀一】私がかぎの頃に、親父の小物入れみたいなものに朝連時代のバッジとか、サッカー大会でもらった銅のバックルとか、かっこいいなと思ってたわけ。親父が大事にしてるものをそっと覗いてみるとかあるじゃない。確か持ってたはずだ。ないわけよ。「バックルとかあるだろ」と聞いたら「処分した」とは言わない、「分からない」ととぼけてた。ははーん、民団役員をやってる頃に共産主義につながるものを処分したんじゃないかなと思ったね。

組織の一員であることを象徴するバッジや、大会で優勝した副賞として贈られた品は、その共同体が作り上げる価値や権威を端的に表すものである。それは子どもだった秀一さんにとって率直に「かっこいい」品々であった。それを処分せざるを得なかった父は、その理由について語らない。秀一さんも突き詰めて聞くことはしない。日本の中における在日コリアンコミュニティの流動性や脆弱性が表象的、造形的形象の継承を阻むだけでなく、親子間にタブーを作り出してしまう側面がこの語りから窺える。

(3) 制度的生活文化

① ジェスチャーや身振り

ジェスチャーや身振り、身のこなしは、上の世代の人物を描写する際に言及されることはあっても、それが世代間を通して受け継がれているかどうかを意識し言語化して語ることはそもそも難しいであろうことが予測される。しかし、高正美さんは幼少期に母からの愛情を感じるができなかったこと、大人になっても疎遠な関係が続き、「生活の知恵」を受け継ぐができなかったこと、そして母の晩年になってようやく関係が良好になった一連のライフストーリーを語った上で以下のようにインタビューを結んだ。

【抜粋 8: 高正美】お母さんは黙々と働いて、子供たちに食べさせて、義務教育させて。お母さんと、もっともっと話ができたらよかったけどね。重なる

よね、年を取るとね。何をしててもちょっとした仕草も。友達がよく言うんです。布巾を洗ってたら「うちらと違う」って。何が違うって聞いたら、「朝鮮のおばさんが洗いよる感じ」って言うんだよね。見たこともないような。それはたぶん親から受け継いだものでしょうね。だから、そのお母さんのもとで私が育ったからよかったんじゃないですか。

上記は正美さん自身も意識していなかったことを第三者から指摘され、それについて考えたときに母から受け継いだものだろうと思いついたという語りである。ジェスチャーや身振りは言語化することが難しい。それがいつどのように親から子に継承されたのかは確かめようもない。しかし上記の高正美さんの語りは、生前話すことを通して互いを理解することができなかった母親から受け継いだものが今、自身の日常の所作の中にあるという。これ以上に力強い親子間生活文化継承があるかと感じさせる語りである。

② 行動様式、③ 日常的慣習、④ マナー・エチケット

石川(1998)の行動様式、日常的慣習、マナー・エチケットの項目について、語りに表出するものを明確に分類することは難しい。たとえば、鄭真樹さんの母が「膝を立てて座り(行動様式)、お茶碗を持たずにスッカラ(スプーン)でご飯を食べる(日常的慣習)」様子は朝鮮人らしさとして同じ文脈内で語られる。内容的な広がりや微細さも興味深い。箸の置き方が座る人に対して縦か横かで朝鮮人、日本人の民族的生活文化をそれぞれ表象するといった具合である。

年齢を重ねて民族的な生活文化の価値を再発見するといったこともある(cf. 橋本・猿橋・高・柳 2015)。洪蓮順さんは朝鮮料理に対する意識の変化を以下のように語った。

【抜粋9: 洪蓮順】どっちかと言ったら私は韓国料理は好きじゃなかった。キムチも食べられへんかった、変な話。今は違う。(韓国の食文化紹介の仕事)をやっていくうちにどんだけ体に良いものを食べていたんだらうって、振

り返ったらね。オモニが仕事の合間合間に作ってくれていたものが。私が作るものはパスタやハンバーグ、洋食が多かった。

大人になってから母親にテールスープの作り方を習った蓮順さんは、今では母親に「私より上手に作る」と褒められるという。キムチは韓国料理の代表とされ、それが「食べられない」蓮順さんは、自ら「変な話」と異質化する。実際に食していた食べ物について、幼い頃はその価値を認めておらず、大人になって「医食同源」などの思想を学ぶことで、キムチも食べられるようになり、韓国料理も好きになり、母親に作り方を教えてもらうようになったと言うのである。

洗濯、特に寝具の洗濯は朝鮮半島から在日コリアン集住地域に受け継がれた生活文化の代表として度々語られた。大きなシーツを干したり、糊付けするときに二人がかりでやる必要があるため手伝った経験が記憶に刻まれているのだろう。趙琴祚さんは小さい頃「もっとしっかり引っ張れ」と母親に怒られたことで印象に残っていると言う。趙幸姫さんは今は洗浄力の高い洗剤と洗濯機があるが、特別な油污れに対処する時、他の洗濯物と区別したい時、糊付けされた寝具が懐かしくなった時などに、昔身につけた手法を今でも実践するという。

⑤ おとなや子どもの遊びに関わる慣習

遊びについての語りは、民族団体の慰安旅行や祝賀行事、スポーツ大会(抜粋7)、地域の祝祭(抜粋5)、日常的な寄合など、生活文化の重要かつ記憶に残る場面として語られた。ただし、大人は大人同士、子どもは子ども達でと分けられており、大人と子どもが一緒になって遊び、そこで民族的な生活文化が直接的に伝承されるといった語りは今回の調査で得ることはできなかった。一世にとっては在日コリアンコミュニティ内で作られていた余暇の機会が、二世以降では「外に遊びに行く」慣習が生まれたことを趙幸姫さんは語る。しかしそれは在日コリアン一世の親にも地域にも理解しがたい行動に映ってもいたようである。

【抜粋 10: 趙幸姫】

趙 私が高校の2年か3年の時にディスコが流行ったのよ、みんなで行くってなって。私だけ11時までに帰らないとってそれぞれそれぞれする。みんな結構平気なんだよね。私だけ、帰ったらどやされるわって思いながら。

* それはディスコに行くって言って出かけるの？

趙 オモニにディスコ行くとは言わないよ。ディスコに行くなんてオモニには理解できないこと。それに「あの子は夜ふらふら歩いてる」って噂になっちゃう。そういう噂はすごいよ、在日の世界。顔がすぐ知れちゃう。そういう世間体の目が怖い。

幸姫さんのこの語りは在日コリアンコミュニティが相互扶助の機能を備えた必要不可欠な存在であると同時に、後に続く世代に窮屈さを感じさせていた側面も物語っている。

⑥ 関係様式

家庭内の関係様式は家庭によってそれぞれであるが、長男が尊重されることは韓国・朝鮮の典型的な家族のありようとして語られた。家族内の関係は生活文化の継承、非継承と密接なかかわりを持つ。

【抜粋 11: 鄭真樹】 私が民族意識に目覚めて行く中で、それまで「おとうちゃん、おかあちゃん」と呼んでいたのが「アボジ、オモニ」って呼び方が変わりました。両親も私たちのことを通名で呼んでいたのを、全員本名で呼ぶようになりました。まずはオッパ（兄）が私たちのことを本名で呼び出したんです。私達はオッパの影響で、同じところで韓国語を勉強していたので、私もいつの間にか「お兄ちゃん」ではなく「オッパ」と呼ぶようになっていました。オッパが徹底的にやった人なので、最初は民族意識じゃなくてオッパが怖かったから（民族のことを学びに）行き出したんです。それがだんだん自主

的に行くようになりました。うちはいわゆる家父長制ですから、アボジの次に偉いのは長男、オッパでした。

抜粋 11 で鄭真樹さんは家族の関係性の変化を親族名称、本名の使用に象徴される出来事として語っている。それが実現したのは、家族内で発言力を持っていた長男(真樹さんの兄)の行動による。これに続く語りの中で真樹さんは、民族意識に目覚めていくことは韓国・朝鮮の文化や伝統に回帰していくのではなく、ひとりひとりが自分らしく「解放されていくこと」であると語る。真樹さんは家父長的な兄が「昔は嫌いだった」と言う。しかし、「民族意識への目覚め」によって兄にも変化があった。真樹さんは「民族意識への目覚め」が、在日コリアンが日本で生きていくための新しい家族関係へと導いたと語っている。

⑦ 地域内や家族内における地位配分と役割の設定

家庭内の役割設定について、特に最初の子どもの出産時は里帰りをして実家の母に世話になったという思い出が語られる。李希淑さんの母親は家族だけではなく、地域の在日コリアンにも日本人にも分け隔てなく面倒見よく接していたという。その面倒見の良さは動物や植物にもおよび、丁寧に生活をする様子につなげて語られた。

【抜粋 12: 李希淑】(お産は)全部オモニに見てもらいましたよ。実家に帰ってお風呂から何から全部してもらって、ミヨック(わかめスープ)も作ってもらって。ああ、猫を飼っていたんです。で、猫もね、お産をしたらミヨック作ってやっていました。それぐらい大事、みんな大事。花もよく育てていて長いこと育てる、すぐに死んだりしない。

李希淑さんは「料理は母が全部教えてくれました」という。受け継ぐ背景には親子双方の「伝えたい」「知りたい」という構えが重要であるが、それだけではない。別の背景として、作業の役割分担がある。たとえば、手早く料理するた

めには、子どもに手伝わせるよりも一人でやってしまった方が効率的である。

【抜粋 13: 黄玲玉】母は、身体を動かして、労働が好きやねん。それが成果になるしお金になる。文字は知らないけどめっちゃ計算早い。昔は私らに、ご飯作れとかそんなのないねん。なぜかっていうと、あんたがゴタゴタご飯作ってるよりも、袖口なんぼをガーッとやってくれる方が自分にとってはいいからやねん。自分はビヤッと走って市場行って買ってきて、めっちゃ早くごはんを作って、さっさとご飯食べて、洗い物もパーッとめっちゃ早いねん。そんなやるから。勤勉そのものや。それから見ると、私は怠け者や。とんでもない。とんでもない。もう足元にも及ばない。いつもそう思ってる。

できる部分をできる人が担う。横に座って手取り足取り学ぶということはない。役割分担は生活文化の一類型にも挙げられているが、在日コリアンの置かれた経済的に困難な状況も関連している場合もあることも忘れてはならない。

それは薬草などの活用でも同じことが言えよう。病気や怪我をした時は緊急を要する。だから母親は子どもに手伝わせたり、教えたりということをせず、自ら山に入って薬草をつみ、急いで煎じて飲ませる。平常時はその必要性がないので伝えることもしない。結果として薬草の見分け方や煎じ方は子ども世代に伝わることなく途絶えてしまう。それは残念でもあるが、母親に尽くされた特別な思い出の語りともなる。

4. 考察

本論では石川(1998)が提案した生活文化項目の枠組みを拠り所に、在日コリアン二世が親から受け継いだ、受け継がなかった生活文化の語りを民族との結び付けられ方を中心に見た。それぞれの語りの考察から以下の14項目が導き出される。

1. 家庭内の生活文化は、民族的なものとしてだけでなく、人物に特有なもの、

生活文化と民族文化の親子間継承

すなわち人格を語る上で参照されることがある。

2. 第三者からの指摘や、次世代に生活文化・民族文化の継承を認め、初めて自分自身も継承していたことに気付かされることがある。
3. 親が期待する生活文化・民族文化の継承の程度に応じて、継承したか、継承しなかったかが分けられる。
4. 生活文化・民族文化の継承の程度が、経済的および社会的基盤、親子関係の親疎の指標とされることもある。
5. 特定の民族文化の継承が規範とされ、そこを指標に各々の家庭の状況や個人の資質や特徴が語られることもある。
6. 親世代が実践していた生活文化が、民族文化として括れるものなのか、そのルーツについては曖昧なことが多い。ただしルーツが曖昧であったり、納得できないものであるが故に印象的なもの・こととして残される一面もある。
7. 親の感情表出が伴っていた生活文化・民族文化ほど印象的に記憶と実践に残される傾向がある。
8. 時間を経て、継承したこと・しなかった生活文化・民族文化の意味が変わる。
9. 直接の指導を受けることがなくても、身体に染みついていることを感じる生活文化・民族文化もある(味覚・リズム・所作)。
10. 父と母で相反する生活文化・民族文化を持っていた場合、両親間の不和や摩擦を回避するために子世代は積極的に継承しないことを選択することもある。
11. 民族文化を継承することの価値や、実行可能性は当該民族コミュニティの安定性の影響を受ける。コミュニティが流動的だったり、脆弱な場合、親子間でタブーとなることもある。
12. 民族コミュニティ単位での生活文化・民族文化の継承活動の場合、親から子へではなく、先輩から後輩に受け継ぐものもある。その場合、子世代は大人同士の継承活動を目撃する存在となる。
13. 家族内の役割分担が生活文化・民族文化継承に多大な影響を及ぼす。

14. ひとつの生活文化・民族文化継承のために、他の生活文化・民族文化継承が断念されることもある。(民族的アイデンティティを確立する上で伝統的な家庭内の性役割が変わるなど)

生活文化と民族文化の接点に注目して考察を加える。項目1に掲げたとおり、生活文化における民族的な要素について、話者による意味づけられ方は様々である。たとえば、研究者や教育者の多くは在日コリアン二世以降世代の韓国・朝鮮語を民族文化継承の代表例として扱うが、抜粋2の余徳子さんの語りは父親の態度や人格を語る上で参照している。産後ケアの「ミヨック(わかめスープ)」も在日コリアンの生活の知恵の代表例とされるが、抜粋12で李さんは、人に対してだけでなく動物や植物に対しても優しく丁寧に接する母親を表現するディスコース資源として用いている。

項目5に掲げたとおり、特定の民族文化の継承を一般了解として、自分が生まれ育った家庭や個人の特性が語られることもある。抜粋9ではキムチが韓国・朝鮮文化の象徴という前提があるからこそ「キムチが食べられない」ことが「変な話」とされる。一般了解としての民族文化は、個々人の経験の語りの中で参照され、各々の経験を典型例にしたり、例外にしたりと、その位置づけを定めるためにも用いられる。また、余徳子さんの子どもの誕生祝の語り(抜粋3)に見たように、生活文化の中で韓国・朝鮮の民族文化を実践し、継承することが、その家庭の社会経済的地位の高さの指標としても用いられ得ることを示している(項目4)。

民族性が生活文化の項目間でトレードオフの関係と捉えられることもある(項目14)。宋宏明さんの父親は楽団を組んでおり、生活の中でも歌や楽器演奏が常にあった。そのため民族のリズムは宏明さんの「体の中にある」(抜粋5)という。一方で、宏明さんは父の楽団という仕事上の性質から、朝鮮料理に固執しない食習慣が育まれたと説明している。

【抜粋14: 宋宏明】アボジはこちらに来て、行商をしたり楽団を作ってあち

こち回っていました。すると日本の生活の中に溶け込んでいく。食べ物もそう。だから、ウリ（私たちの＝朝鮮式の）ご飯がどうか食事がどうかは特にこだわらなかったです。逆に何でも食べた。私は何でも食べる。

つまり韓国・朝鮮の味付けの食事を追求するためには、食材を育てたり、味噌を長期間かけて作るなど定住を必要とする。行商や楽団といった職業ではそれはできない。しかし、宏明さんにはそれと引き換えに継承した音楽のリズムという民族性がある。かくして民族的な味を継承していないことについては、何でもこだわりなく食べるという食習慣に置き換えられ、それは身につけた民族のリズムと共に宏明さんにとっては在日コリアンであることと密接につながっているのである。このように、何気ない日常の中で同時共起する複数のもの・ことの交渉と融合の中で、在日コリアン一世から二世への世代間継承は断続的に行われ、一世が他界した後でも意味付けと再解釈は継続していると言えよう。

5. おわりに

Chapman (2008) は、「在日であること」を求心力とする集団的アイデンティティと個人の多様性をどこまで尊重するかは、両者を極とする連続体の中で綱引き関係にあると指摘する。語りの分析において、個人の独自性を探求する視座はどこまでも展開可能で「ひとりひとり違う」と結論づけるのは容易い。しかし、それでは在日コリアンの世代間の課題や日本社会でのあり様に建設的な示唆を提示し得ない。

本稿で見た在日コリアン二世のライフストーリーからは、在日コリアン文化の典型と目されている事柄が別の文脈から語られたり、在日コリアンコミュニティに典型あるいは理想とされている世代間継承の了解を前提に、自分たち家族の独自性や、個人的な意義を表現するためにそれらを用いることもあった（項目5）。親子関係が親密であるか疎遠であるかは、必ずしも民族文化継承の有無を決定づけるわけではない。親と疎遠であり、親から民族文化を受け継いでいないと思っている人が、思いがけず他者の指摘からの指摘で継承されている部

分を見いだすこともある(項目2)。親の継承への期待が高ければ、欠落している部分に注目が行き「十分に継承し得なかった」という感覚が印象づけられることもある(項目3, 7)。また親子関係が良好だから民族文化継承が行われたとする見方もあるが、翻って民族文化継承の有無でもって親子間関係の良好さ、疎遠さが判定されることもある(項目4)。親子関係と民族文化継承は、私的レベルの関係性だけではなく、在日コリアンコミュニティに共有されている価値観や前提、規範を参照しながら語られ、解釈される(項目11)。

移民の文化実践についてFriedman(1997)は社会的文脈からの理解と同時に、営みや行動について何に動機づけられ、どのような意味を付与されているかを探求していくことで理解が深まるという。そうした移民の世代間継承の主観的意味の探求は当該のコミュニティをめぐる通説を覆すような「主観的資源」としての機能を発見する可能性を秘める(Delcroix 2000)。本論で見た継承したものの・ことのレパトリー、継承したことと継承できなかったこととの行き来、継承への転換可能性、在日コリアンであることとの結び付けられ方の多様性は、従来の世代論が内包する世代ごとの差異を際立たせる傾向や、特定の民族文化を継承の指標とする視座に示唆を与え得るのではないだろうか。

謝辞：本研究にご参加くださった調査参加者の皆さまに心から感謝申し上げます。本研究はJSPS 科研費、基盤研究(C)「在日韓国・朝鮮人一世から二世への生活文化の形成および世代間継承の研究」の助成を受けた研究成果の一部です。研究を共にし、草稿の段階で貴重なコメントをくださった橋本みゆきさん、高正子さん、柳蓮淑さんに感謝申し上げます。

引用文献

- Arber, S. & Attias-Donfut, C. (2000). Equity and solidarity across the generations. Arber, S. & Attias-Donfut, C. (Eds.). *The myth of generational conflict: The family and state in ageing societies*. (pp. 1-21) Oxon: Routledge.
- Bengston, V. L., & Roberts, R.E.L. (1991). Intergenerational solidarity in aging families: An example of formal theory construction. *Journal of Marriage and the Family*, 53, 856-870.

- Chapman, D. (2008). *Zainichi Korean identity and ethnicity*. London: Routledge
- Delcloix, C. (2000). The transmission of life stories from ethnic minority fathers to their children. In Sara Arber & Claudine Attias-Donfut (Eds.), *The myth of generational conflict: The family and state in ageing societies*. (pp. 174-189) Oxon: Routledge.
- Friedman, J. (1997) Global crises, the struggles for cultural identity and intellectual porkbarrelling: Cosmopolitans versus locals, ethnics and nationals in the era of de-hegemonisation. In P. Werbner & T. Modood (Eds.), *Debating cultural hybridity. Multi-cultural identities and the politics of anti-racism*. (pp. 70-89). London: Zed Books.
- Hall, S. (1996) Introduction: Who needs 'identity'? In S. Hall & P. du Gay (Eds.) *Questions of cultural identity*. (pp. 1-17). London: Sage.
- 橋本みゆき, 猿橋順子, 高正子, 柳蓮淑 (2015) 「食における在日韓国・朝鮮人 1 世・2 世の成果文化継承——2014 年大阪調査からの予備的考察」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』12: 32-39.
- 石川実 (1998) 「生活文化のとらえ方」石川実・井上忠司 (編) 『生活文化を学ぶ人のために』世界思想社 pp. 1-14.
- Levitt, M. J., Guacci, N., & Weber, R. A. (1992). Intergenerational support, relationship quality, and well-being. *Journal of Family Issues*, 13 (4), 465-481.
- Phinney, J., Ong, A., & Madden, T. (2000). Cultural values and intergenerational value discrepancies in immigrant and non-immigrant families. *Child Development*, 71 (2), 528-539.
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房
- 猿橋順子 (2016) 「アイデンティティの語りと継承言語の位置付け——ある在日コリアン二世女性のライフストーリーのポジショニング理論分析」『ことばと社会』18号, 東京: 三元社, pp. 35-60.
- van Dijk, T. A. (2001) Multidisciplinary CDA a plea for diversity. In R. Wodak & M. Meyer (Eds.), *Methods of critical discourse analysis*. (pp. 95-121). London: Sage Publications. (ヴァン・ダイク, テウン A 服部圭子 (訳) 「学際的な CDA——多様性を求めて」ヴォダック, ルート & マイヤー, ミヒャエル (編著) 野呂佳代子 (監訳) 『批判的談話分析入門——クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』東京: 三元社, pp. 133-166.)